

国宝 雪松図（ゆきまつず）と花鳥

—美術館でバード・ウォッチング—

三井記念美術館（東京・日本橋） 2017. 12. 09～2018. 02. 04

正月恒例の「国宝 雪松図屏風」の展示に合わせ、今回は館蔵品の中から“花鳥”をテーマに作品を選んで展示されているが、なかでも「鳥」が描かれた絵画や「鳥」を象ったり、「鳥」にあやかった名称の工芸品などに焦点を合わせ、花鳥園の鑑賞とともに美術館でバード・ウォッチングを楽しめる企画である。

この「鳥類真写図巻」を収集したのは、ニワトリが好きで生涯研究テーマに鶏を研究していた新町三井家の「三井高遂（たかなる）」（1896～1986）である。

円山応挙（1733～1795） 国宝《雪松図屏風》6曲1双 展示は01.04～02.04



画伯は、18世紀中頃に京都で活躍した円山派始祖の代表的な絵師で、作品は老松と若木に雪景色のみが眩しく描写され、画面の継ぎ目のない一枚の紙で仕立てられている。そして、金泥のみで雪と松、土坡（どほ）の起伏と背景の空間を描き、金砂子（きんすなご）を蒔いて光のきらめきを表している。

1765年に手がけたこの《雪松図》で、「応挙」独自の写生画様式を確立して、輪郭線を用いなくて「付け立て」の技法で松の幹を描いているが、紙の地の白色をそのまま効果的に生かして雪を表していて、傑作中の傑作とされている。

「応挙」の集大成の本図は、17mを超える長大な図鑑であることと、薄い本紙のみの巻物のため、これまでの展覧会では一回展示されただけで、本展では思い切って全図を一挙に展示公開されている。作品は、引いて見れば奥行のある構図、寄れば紙地の余白を活かした雪の繊細な描写と“緻密な描写と奥行のある構図”で描かれているが見どころである。

他の展示品は、三井家の鳥好きを反映して館蔵品の中から「鳥に関連した茶道具や工芸品」や「花や鳥が描かれた掛け軸」などの作品が展示されている。